

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
3 6 3	滋賀医科大学福祉保健医学講座
題名 (原題/訳)	
The relationship of average volume of alcohol consumption and patterns of drinking to burden of disease: an overview 飲酒量及び飲酒パターンと疾患発症との関係について：概説	
執筆者	
Jürgen Rehm, Robin Room, Kathryn Graham, Maristela Monteiro, Gerhard Gmel, Christopher T. Sempos	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Addiction(2003) Volume 98 Issue 9 Page 1209-	
キーワード	
平均的飲酒量、飲酒パターン、疾患、外傷、疫学研究	
要 旨	
<p>(目的) 飲酒量および飲酒パターンと疾病・外傷との関連を定量的に評価すること。また、飲酒量とリスク評価のデータを集積することによって、各地域および全世界での疾病発症・外傷発生におけるアルコールの関与の程度を明らかにすること。</p> <p>(方法) 既存の研究を系統的に文献検索することにより、アルコール関連疾患を選定した。メタ解析によって飲酒と疾病との関連を示した。また、既存のデータを集積して種々の解析をおこなうことにより、個別の研究では明らかにできなかった疾病と飲酒との関連を示した。飲酒が疾病や外傷に寄与する割合については、飲酒による疾病や外傷の発生の相対危険度を明らかにすることによって、もしくは、そのような研究を集積することによって評価した。</p> <p>(結果) 飲酒量は、口腔咽喉頭癌、食道癌、肝臓癌、乳癌、単極性うつ病、てんかん、アルコール依存症、高血圧性疾患、出血性脳卒中、肝硬変といった主だった慢性疾患のリスクを増大させた。冠動脈疾患、不慮または意図的な外傷は、飲酒量に加えて飲酒パターンに影響された。疾病に与えるアルコールの影響の多くは有害であったが、特定の飲酒パターンについては、冠動脈疾患、脳卒中及び糖尿病に予防的に働いた。</p> <p>(結論) 飲酒は主要疾患の多くの発症に関与し、有害な影響を与える傾向にあった。平均的飲酒量は検討した全ての疾患と外傷発生に関連し、冠動脈疾患と外傷については飲酒量以外に飲酒パターンの影響を受けていた。従来の疫学研究の多くは飲酒パターンを考慮していなかったため、それらを集積した本研究での飲酒パターンの影響は過小評価されている可能性がある。これらの知見の一般化の可否については、集積した研究の一般化の可能な範囲に制限される。よりの確なリスクの推定をする為には、今後これらの方法論的問題を考慮する必要がある。</p>	